心療内科医のひとり言 2016

中野弘一 医師

～5～

薬の量が足りない

内科治療の修行中に、処方箋に薬の処方を書くときには、神様に「どうかこの薬がうまく効きますように」とお願いする気持ちを込めて書くものだと上級医に教えられた。

40代の主婦の方について内分泌内科を専攻する仲間から、心療内科に依頼があった。気分の不安定とともに血圧が大きく変動するため、長く近所のかかりつけ医の先生に血圧の薬と一緒に安定剤をもらって服用していたが、そこが閉院したという。

私が心療内科を担当している病院に継続加療の依頼があった。長時間作用型の抗不安薬を1日1回1ミリグラム処方され服薬していた。抗不安薬の継続的な投与を彼女は希望したが、同じ薬は病院には採用されていなかったので、同効薬を選び、1日2ミリグラムを2回服薬するように処方した。

1週間後に不安症状が再発し、予定の診察前に受診した。信頼していた主治医がやめてしまったことも要因であると判断され、心療内科に委ねられた。睡眠も安定せず、不安に耐える力も弱くなっていた。確かに治療者の突然の交代も影響がありそうだ。

服薬状況について問診を続けると、夕食後に服薬するのをよく忘れるということだった。理由を聞いてみると今まで1ミリグラムを1日1回飲んでいたのに、新しい処方だと1日2回なので2ミリグラム飲むことになる。ちょっと多いのではと思い、なるべく1日1回にコントロールしようという気持ちもあったと教えてくれた。

僕は抗不安薬の作用の強さの考え方を彼女に説明した。作用は作用時間と効果の強さによって決められているので、以前服薬していた薬と同じ効果を得るには今回の薬を1日1ミリグラムずつ3回飲むことが必要だと伝えた。

つまり新しい薬は3ミリグラムで今までの薬1ミリグラムと等価なはずなので、使ってみてほしいと伝えた。次の受診ではすっかり症状はとれていた。その次も全く症状は安定していた。彼女はこの量で続けたいと話してくれた。

薬の量の調整で不安症状はコントロールできたようだ。僕は薬力学という科学の神様に感謝し、これからも何事もありませんようにと願いながら1日3ミリグラム1日3回毎食後と処方箋に書いた。

（三愛病院心療内科医師・東邦大学医学部教授）

（2016年度分はおわり）